

い	た	ば	し
ビ	オ	ト	ー
プ	ネ	ッ	ト
ワ	ー	ク	

学校訪問シリーズ 13

自然からの感性を身につけ、 人にやさしく思いやりのある子、 感動する心を育てる

—自分を好きになり

自分に自信を持つ子どもを目指す環境学習—

板橋区立桜川小学校

桜川地区は、5万年前にできた武蔵野台地の北東端の武蔵野ローム層を削り、湧水が流れ込んだ石神井川によってできた低地にある。

両側を氷川台、桜台、川越街道北側の中台、ときわ台にはさまれている。このほitori、小茂根5丁目のオセド山で2,8万年前の世界最古のナイフ型石器が学生によって発見された。一茂呂遺跡—石神井川の川縁である。板橋区では最古の発見が、8千年前の縄文土器であったので、旧石器時代（3万～1万年前）から、板橋に人類が住みついていたことが初めてわかった。ついでにいうと、板橋区は、23区内で世田ヶ谷に継いで、2番目に遺跡が多い区である。

このような古い時代から、人々に愛されてきた桜川地区。近代にたくさんの農家、牧畜業が営まれたのも、自然がもたらした肥沃な土地のおかげかと思う。

桜川小学校で、最近新しい試みが始まっていた。それは、5年前に創った学校ビオトープを土台に、耐震工事、大改修を経て創った 田んぼである。

6月の雨の中、まるで違う学校に見える大改修が完成した桜川小学校を訪ねた。



根岸永福校長先生

Q1 今回の耐震工事・大改修工事の内容はどんなものですか。

根岸永福校長先生—耐震工事と校舎改修、一部改築を行い、周囲の環境もきれいにしようというものです。管理棟を児童に近いところに変えたり、中庭に憩いの場所を設置し、観察広場にしたり。授業のメモをしたりできるテーブルやベンチ（ウッド）を40名分設置し、時計をつけた。早速、子どもたちが授業で使っています。

Q2 中庭一面が見事な人工芝ですが、敷設の理由は何ですか。

根岸校長先生—天然芝はメリットデメリットがあります。整備された天然芝はこの上ないが、670人の子が思い切り遊ぶには、天然芝では難しい。

今、子どもたちがのびのび寝転がっている。人工芝にも2種類あり、長いものと砂混じりの短いもの。長いものはやわ

らかい。(肌触りがとても人工芝には感じない一筆者)芝の間に粒子が細かい砂・ゴムチップ・を入れると、芝が立ち、踏み固められてやわらかくなる。子どものテニスクラブができた。これから、土、日の寺子屋などテニスクラブの設立が予定されている。子どもが喜び、倒立、バク転、前回り、ヨガなどを行っている。管理は、落ち葉などを拾い、掃除機で吹き付ける。外履きで行くが、裸足の子もいる。擦り傷はないが、ひねったりはある。その他に、屋上に64m²の天然芝を植えています。



地域の力強い支援者 四季の会会長田村さんと相談中

Q3—取り組まれている環境教育はどのような内容ですか。

根岸校長先生—生活科や総合的な授業で、木の実を探し工作したり、虫探しをしたり、班毎に“私の樹木”を決めて観察を続けたりしています。高学年では、森林浴をしながら、毎週走り、マラソン大会を続けています。

四季の会・田村会長さん—今年から夏の夜は、8月11日にナイトウォークをします。大勢参加すると思います。セミ・コウモリ・タヌキなど観察できます。野鳥観察会や、全国一斉水質検査で、石神井川の検査等を、桜川小の子どもたちと行っています。

Q4—5年生が創った田んぼについて教えてください。

手塚和重先生・藤本康史先生・新井美穂先生—土作りから行いました。ぬかをまくとよいと、新潟出身の保護者の方に教えてもらい、ただでくれるところを探したら、地域の〇〇ストアが提供してくれました。保護者の協力で栃木県から苗を手に入れ、福島県の知り合いの方と携帯でやりとりしながら、土作りの仕方を教わりました。ぬか土の上に腐葉土、荒木田、水と重ね、どろんこ祭りをして子どもたちに混ぜてもらいました。腐葉土は沈み、ポコポコとメタンガスが発生するので、穴を開けて、メタンガスを出しました。



みんなで創った田んぼを熱く語る手塚先生と藤本先生

ある時、ボウフラが発生したので、子どもたちにどうする？と考えさせた。

「メダカを入れよう。」ということになった。(今、生き生きとメダカが泳いでいる)冷たい水を温めるところとして一角に水を張った。ぬかはメダカも食べる。これから、不耕起栽培を目指します。(稲の根を取らずに翌年はそれを肥料化して行く自然農法で米はおいしい)水を入れっぱなしにする。

子どもたちは、どろんこ祭りを保護者と一緒に喜んでくれた。この祭りは、子どもたちの元気の気を入れることと、かき回すことが目的。朝登校すると、喜んで田んぼを見に行く。糸ミズがぬかを食べに来る。だんだん真っ赤になる。ぬかを入れると稲が青々としてくる。稲の根もしっかりした。米作りはしっかり助け合って生きていく姿勢を育てていくと確信しています。

Q5 ビオトープをどのように活用されていますか。

土田広昭先生—ビオトープ委員会ができています。週2回、子どもたちが、子どもたちを案内しています。児童朝会の最後に、観察会の呼びかけなどをしています。6年生が1年生に虫や池の生きもののことを教えたりしています。

Q6 先生方の子どもたちへの願いを教えてください。

根岸校長先生—自然からの感性を身につけ、人にやさしく思いやりのある子・感動の心を育てることです。

藤本康史先生—一人へのやさしさ・思いやりを育てたい。自己中心から、相手の気持ちを考えられる子へです。

手塚和重先生—自分への自信を持たせたい。気・情熱・自分を好きになること。今の子は、自分に冷たくしている。失敗しても、そこから学ぶ子どもを育てる。



やっと、工事も終わり、ビオトープを子どもたちへ伝える土田広昭先生



【取材を終えて！地域の田村さんをはじめとする支援に囲まれ、根岸校長先生や先生方の優しい笑顔が印象的でした。最古の歴史に彩られた地に育つ子等。何を与え、何を育てるか、一人一人の先生の模索と努力の今を感得できた日。人工芝の緑に負けない生き生きした田んぼの緑は、それはもしや、遙か3万年前の狩猟先人が一番望んでいた姿なのかとも思える。

ビオトープにある子どもたちの観察広場のかわいいベンチのままで。

SOEと大学生の協働企画

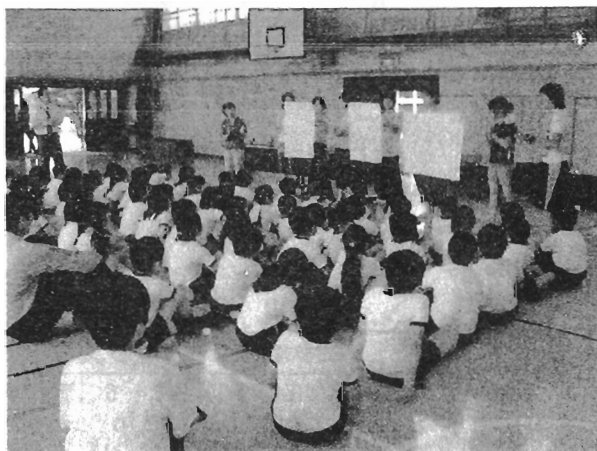
「ヤゴと仲良くなろう大作戦！～生き物と環境のつながりを考える～」

を板橋区立志村第四小学校で実施

6月7日に、SOE・大学生協働による第二回目の環境学習出前授業を、志村第四小学校で実施しました。今回のプログラムも前回に引き続き、ヤゴの採取、観察、そして身の回りの環境と生態系のつながりについての学習です。当日はスタッフとして社会人2名と大学生9名の計11名が参加し、3学年の2クラス、生徒約60人を対象に授業を行いました。

今回の授業が前回と違うのは、舞台がプールではなく、校長先生が熱心に創作に取り組んでいる小さなビオトープだ

大学生スタッフの話を熱心に聞く志村第四小学校の3年生



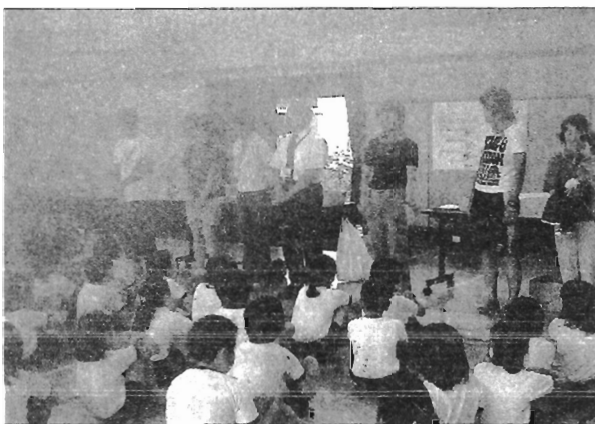
ということ。そして、当日が授業参観日であり、多数の保護者が授業を見学していることでした。そのため当日は人数が分散するよう、ピオトープでのヤゴの採取と、体育館でのルーペや顕微鏡を使ったヤゴや水中生物の観察を、1組と2組が交代で行いました。

体育館に集まったのは、元気いっぱいの子供たちでした。今回も事前説明には腹話術や、森のくまさんの替え歌を使い、笑いを交えながら楽しく聞いてもらいました。

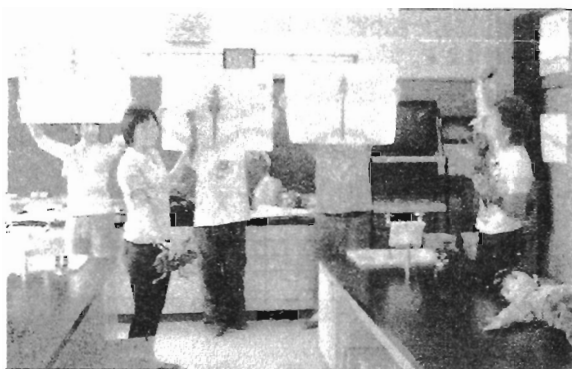
そしてようやくピオトープへ。自然のままの生態系が再現されたピオトープは、背の高い草や虫たちが共存する小さな大自然でした。そこに初めて入っていく子供たちは探検家気分。池を発見すると早速網で池底の泥をすくい始めます。しかし狭い池の縁から身を乗り出しての作業には少々苦戦。スタッフも子供たちが落ちないようにとハラハラしながらの作業でしたが、そのうち「ヤゴいたー！」の音がちらほら聞こえ、アカネ系とシオカラ系のヤゴを採集することができました。一方、ピオトープに生息する他の様々な動植物と触れ合えた子供たちもいたようです。茎にびっしりとついた赤い虫たちや、とげとげのオナモミ、どくだみの匂いを、スタッフに嬉しそうに報告してくれました。さらに、ヤゴの採集中になんとトンボが飛んできたそうです。トンボも子供たちの授業参観をしていたのかもしれないね。

1組と2組が交代し、今度は体育館での観察作業です。ルーペやチャートを使って先程取ったヤゴたちが何系か、どんな体をしているのかをじっくり観察します。そこでは保護者の方々も「ヤゴって何の赤ちゃんなんですか？」「何を食べるんですか？」と興味津々。子供たちがあげた赤虫をヤゴが食べる瞬間には子供たちと一緒に「おおっ！」と歓声を上げていました。また、大人に「触ってみれば？」と言われた子が恐る恐るヤゴを手に乗せ、「触れたね！」「かわいいね！」「もっと大きいヤゴにも触ってみたい！」と会話している場面も見受けられました。これも、授業参観ならではの光景ではないでしょうか。

最後は、生態系と環境について学習しました。何故ヤゴがピオトープにいたのか、それはピオトープにたくさんの自然があり、そこで大小の生き物同士が繋がっているから。だから私たちの身の回りにある自然を守ることは大切なんだ。子供たちは模造紙に描かれた絵や写真に熱心に見入り、発言、質問をしながら、今日出会った生き物と自分たちのつながりを探っているようでした。



「僕は、本当は、ピオトープに入って欲しくなかったのだが、勉強のためだから仕方ないです。」
楽しい坪野校長先生の話をもみんなで聞きました。



出前授業の予行練習に熱心な
学生スタッフ

今回良かったことは、まずピオトープという自然空間から小さな生態系の循環を実感できたこと、そして何より子供たちが大人たちと一緒に学べたことです。滋賀大の市川智史先生は「環境学習とは、「感興学習」をベースに「関係学習」へと繋ぐ学習である」と仰っています。自然に対する気づきや感動を、世代・地域間でつなぐこと。その中で自然と人間、人間と人間のつながりを学ぶこと。それが環境学習の本質であると思います。これからの環境教育は、地域の大人が子供と一緒に学び、一緒に感動し、その中でより良い人間関係の築き方を学べるしくみ・環境づくりが必要であると感じました。

ヤゴの育て方も真剣に聞いてくれた子供たち、もうそろそろヤゴは巣立ちの頃でしょうか。ヤゴの成長とともに子供たちの自然を愛する心も成長してくれたことを願います。

(この文章は、当日学生スタッフとして参加していただいた、法政大学4年 佐藤真由香さんによるものです。)